

CAN-DO リストを作るということ

—— “Yes, we CAN DO it!” と言える基盤づくりのために

松尾 美幸



2011年6月、文部科学省により「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」が公表され、各校が『「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標』設定に向けて動き出した。この際に、外部検定試験団体が公表しているCAN-DO リストやCEFRのような完成されたものを作らなければならないとの誤解が生じた高校現場もあったと聞いている。実際、各校に求められているのは、緻密なデータ分析に基づいて縦横軸にぶれが無く配列された能力記述文のリストではない。「目の前にいる生徒たちに卒業時までには、どのような英語力を身につけてほしいか」を英語科教員全員で協議し、全ての生徒に到達可能な目標を設定すること、そのための授業改善や評価の在り方について目線を合わせた上で実践することである。すなわち、到達目標の共有により授業改善が図られ、よりよい指導、よりよい学びを実現することがねらいであり、CAN-DO リストを作ること自体が目的ではないはずなのだ。

◆ HUKUOKA CAN-DO について

岩手県立福岡高校のCAN-DO リストは、2010年に立ち上げた校内英語指導改善プロジェクトの一環として産声を上げた。プロジェクトの柱は、次の3つである。

- ① 新学習指導要領に沿った授業実践
- ② 到達目標・指導・評価の一体化
- ③ 英語科全員によるチームとしての実践

①では、文法訳読式授業からの脱却を図り、4技能統合型授業を実践する。つまり、「今日の授業

で習ったことがわかったか？」で終わるのではなく、「今日習ったことを使って何ができるようになったか？」を確認できる授業へのシフトが図られる。すると、紙ベースのテストのみでは測れないスキルをどのように評価するかという議論が浮上する。そこで②を英語科全員で議論しなければならなくなる。プロジェクト始動と同時に、科内でCAN-DO リストの必要性を共有できたことで、その後の授業改善が比較的円滑に進んだと思っている。

◆ 3年間を見据えた到達目標設定

学習到達目標設定にあたり、まず、3年間で育てたい生徒像について話し合った。教育目標に基づき「知・徳・体の調和のとれたコミュニケーション能力」、それに加えて「地域を誇り地域が誇る地球市民としての資質」を兼ね備えた生徒の育成という目標を共有した。そこで、3年間で、どのような力を、どのようなプロセスで育成していく必要があるかを具体的に洗い出していく。必要とされるスキルの難易度については外部指標を参考にしつつ、学年毎の学習到達目標を逆算する形で設定した。堅実に基礎基本を大切にする4技能統合型の学習活動に加えて、目的に応じた読み方・聞き方を通じて理解する力、豊かな表現力・逞しい発信力を養うためのアウトプット活動を共通の項目として組み入れる。

この到達目標設定によって教科書採択の在り方も変わった。教科書には、授業で大事にしたい「生徒同士」「生徒と教材」「生徒と世界」との

『つながり』と、学習を通じての『気づき』を生む題材集であってほしい。また、Reading を Speaking につなげる Story Retelling の訓練を重ね、段階的に Speech の自由度を高めていく仕掛け作りを授業内で行うのに適した活動配列、そして、その活動に十分なトピックの面白さや問題意識を喚起する深い内容も求めたい。このような視点やニーズに基づいて採択を行った。

こうして3年間に体験させたい言語使用場面とそこに求められるスキル、その体験によって育てできるコミュニケーション能力を反映したものが CAN-DO である。つまり、CAN-DO リストとは、「3年間の言語活動の見取り図」なのである。

◆生徒の自信につなげる CAN-DO の活用

学習到達目標を設定する際に、本校では HUKUOKA CAN-DO GRADE という参照枠を活用した。「グレード」という名称を使用しているため成果指標と誤解されることもあるが、そうではない。入学時の学力の差が大きい生徒集団に対応するために、複数のレベルの到達目標を1つの表にまとめたものである。1種類の到達目標では、一部の生徒にとっては卒業時まで一貫して CAN-NOT-DO リストに終わってしまうかもしれない。また逆に、あるレベル以上の力を持って入学した生徒は、入学早々に目標をクリアしてしまうかもしれない。Slow learners にとっては比較的ハードルを低く設定している Grade 1 から3まで、Advanced learners たちにはやや challenging な Grade 4 から6まで、というように入学から卒業時まで、どの生徒も最低2グレードアップを実現させたいという主旨のものである。年に2回、生徒全員が Grade 表内で「自分ができると思う」能力記述文のマスを色鉛筆で塗っていく。毎回異なる色を使うため、自己の伸びや自信の度合いの高まりが目に見える。各生徒が、「今自分にできること」と「これからできるようになりたいこと」を確認し内省する機会を保障すること

は、動機づけにもつながる。これが、生涯にわたって外国語を学び続ける自律した学習者の育成にも資すると考えている。

◆CAN-DO を生かした授業デザイン

CAN-DO リストの形で明示した学習到達目標をいかに観点別評価規準とリンクさせた上でシラバスを作成するかについては、自治体や各種研究会にて研修が行われているので、この誌面での詳しい説明は割愛する。本校では、各科目のシラバスに、学年の学習到達目標を明記した後に、各単元の目標を評価の観点別に掲げ、個々の目標に対応する評価規準に相当する目標 CAN-DO を提示している。幸いにも、*Genius English Communication* シリーズに用意されているシラバス例と観点別評価規準例が、実に細やかに、かつ指導との整合性を図りやすい適切な文言で与えられているため、シラバス作成には大いに役立った。

例) 1年次学習到達目標「話すこと」より

- ・聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、自分の意見を表現したり相互に意見を交換したりすることができる。



単元の目標：Lesson 3 (*Genius I*)

評価規準：〈表現〉の能力

- ・絵や写真などの資料を使いながら、よく知っている話題（日本文化）に関して、説明する。



言語活動の目標：（授業時に生徒に提示）

- ・コンセプト・マップや絵を使って、風呂敷の歴史について、ペアで聞き手にわかりやすくリテリングすることができる。

発表時には、つなぎ言葉の活用やアイコンタクト等発表態度を褒めつつ、生徒が“My English”を駆使しながらプレゼンテーションができるように促す。

◆教科書や評価との関連づけ

「CAN-DO リストを評価のために活用する」ことは、「CAN-DO をそのまま測定の道具として使用する」ことではない。到達目標が達成できたかどうかを確かめるテストは、整合性・妥当性ともに吟味された内容のものでなければ生徒の英語力・学習意欲の向上につながらない。

本校では、各期にスピーキングとライティングのテストを実施し、評価に組み入れた。4技能統合型の授業を行えば、当然のことながら、表現の力はパフォーマンス・テストによって評価する必要が生じる。例えば、即興スピーチとその内容についてのQ&Aといった簡単な表現・やりとりの力を確認するインタビュー形式のテストである。「内容・流暢さ・正確さ・やりとりを続けようとする意欲・態度」といった観点に沿って加点方式で評価した。待機している生徒たちはその間、ライティングのエッセイテストに取り組んでいる。パフォーマンス・テストを実施して嬉しい驚きだったのは、被験者である生徒たちの楽しそうな表情である。指導者と個別に英語で対話し、肯定的なコメントをもらうことが嬉しいのだ。生徒が英語のテストを、「自分がここまでできた」と実感できるチャンスだと前向きに捉えていること自体がCAN-DOの成果であると実感している。

◆CAN-DO リストを用いた指導の成果

CAN-DO リストを用いた到達目標を、生徒と教師、および教師同士が共有することで、自分ができることが増えていく実感を持って生徒たちは意欲的に学ぶことができる。同時に教師も、良質なインプットと豊かなアウトプットを導く授業を目指し授業改善に取り組む。また、共通の目標や

メソッドがあるからこそ教員集団は真の意味で切磋琢磨し互いから学ぼうとする。良い学び、良い指導は、授業の質そのものの向上につながる。

Genius I の Lesson 10 “Life in a Jar” を扱った授業中のことである。英語が大の苦手なF君が、“If you were Irena, would you oppose the unfair seating system?”という自由英作文で“*No, I wouldn't, because...*”で力つきてしまった。本校のライティングCAN-DOには「友人が書いた英文の中で、内容が面白い部分や気に入った表現などに下線を引きながら読み、内容について簡単なコメントを書くことができる」という能力記述文がある。互いにエッセイを読み合い、コメントし合った後、彼がライティング欄に残した十分過ぎるほどの空欄は、色鮮やかなペンで書かれた友人たちのコメントで満たされていた。

- Why? I think you could oppose the school's seating system.
- I think if I were Irena, I wouldn't oppose. I want to know your reason!!
- I think discrimination is bad. What do you think?

教師がコメントを書く余白はなかった。

“Yes, I CAN DO it!”と生徒が胸をはり、“Yes, you CAN DO it”と教師が生徒の背中を押し、“Yes, we CAN DO it!”と教師同士が肩を組む。そうした機会を与えてくれる宝島の地図がCAN-DOである。そして今まさに自分の目の前で、生徒同士が“Yes, you CAN DO it!”と励まし合い、逞しく学びの共同体を築きつつある。教室に散りばめられたキラキラした奇跡の瞬間を楽しみながら、新しい気づきや発見、生き生きとしたやりとりに満ちた授業を展開していきたい。

◆参考文献

文部科学省. (2013). 『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』

(まつお みゆき・岩手県立福岡高等学校教諭)